

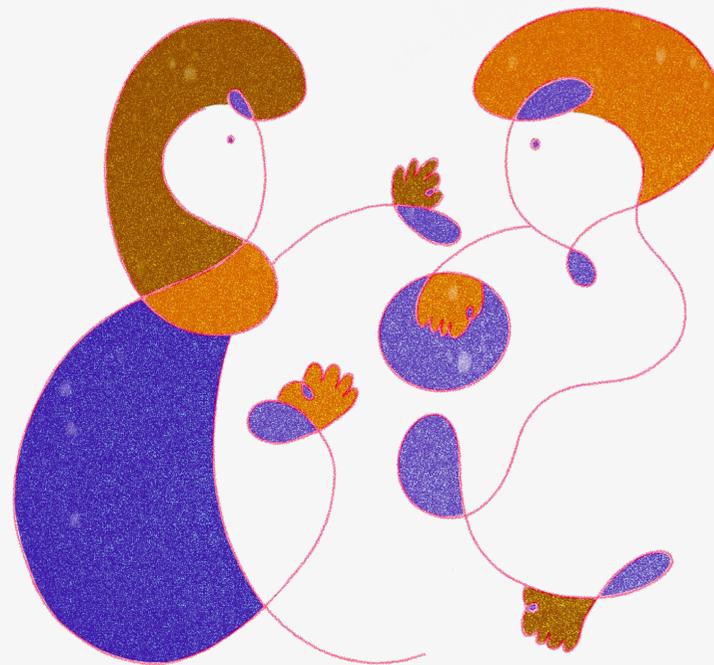
Citizenship for Children 2021

認定NPO法人PIECES
成果報告書



目次

- 03 子どもを取り巻く現状と課題
- 04 Citizenship for Children (CforC) とは？
- 06 CforC2021の全体像
- 07 活動報告：みつめるコース
- 08 活動報告：うけとるコース
- 09 活動報告：はたらきかけるコース
- 10 活動報告：うけとる・はたらきかけるコース／アクションサポート
- 11 修了生が取り組むプロジェクト
- 12 プロジェクトで生まれた子どもに関するエピソード
- 13 学習効果
- 14 参加者自身や周囲に生じた変化
- 15 参加者の声
- 16 今後に向けて
- 17 Special Thanks



子どもを取り巻く現状と課題

“周りに人がいなかったわけじゃない。でも誰も自分の本当の気持ちに向き合おうとしてくれなかった。何のやる気も起きないし、大人のこと信じられなくなった。一人でもいいからちゃんと話を聞いてほしかった”

これは、これまでの活動を通して出会ったある若者の言葉です。彼の背景には複雑な家庭環境がありましたが、「自分の声を聞いてくれる安心できる大人がほしい」というその願いは私たち一人ひとりに向けられた訴えでもあると感じています。

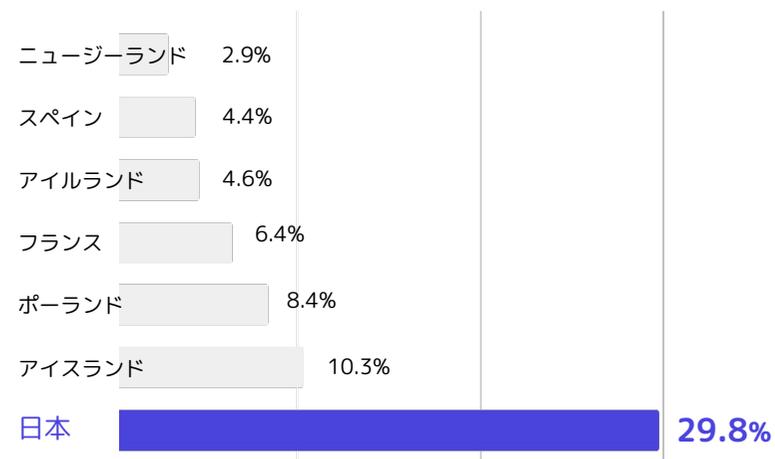
内閣府の「子供・若者の意識に関する調査」（2019年）では、「どこにも相談できる人がいない」子どもが約5人に1人。「どこにも居場所がない」と答える子どもが約20人に1人存在しながらも、約7割の子どもが「支援機関を利用したいと思わない」と答えています。子ども若者の孤独・孤立が深まる中で、心の傷に十分な手当てがなされず、不登校や精神疾患、果てには自殺などといった形で、健康やウェルビーイングに深刻な影響を与えています。

より本質的には、傷を深める前の初期段階で予防的なケアをできるようになることが、子どもにとっても社会にとっても重要だと考えられますが、行政機関や専門機関はひっ迫状態にあり、より重症化したり緊急性を増したケースの対応に追われているのが現状です。

一方で、市民社会に目を移すと、6割以上の人々がボランティア活動に関心を持っているというデータもあります。しかし、実際に行動に移している人は約25%と大きなギャップがあり、またせっかく行動に移しても、そのような草の根の活動や市民活動を支える仕組みや、学ぶ機会もないために持続的な取組にはなっていないというのがこれまでの活動を通して見えてきた現状です。

日常的なレベルにおけるケアの視点や気づきの視点を、地域コミュニティで共に暮らす市民が有していくことには潜在的な可能性を秘めていると考えています。市民による取組、市民参加を促していくことがこれからますます重視されてくる中で、気づきの目と安心感のある関わりを身につけた人が、まちのあちこちにいる環境をつくるという一朝一夕には成しえない取組だからこそ、その歩みを加速する必要があると考えています。

子どもの孤独・孤立に関する国際比較 各国の15歳の子どもが「孤独を感じている」と答えた割合



出典: An overview of child well-being in rich countries”, UNICEF Innocenti Research Centre, 2003 より作成

頼り先がなく孤立する日本の子どもたち



出典: 内閣府「子供・若者の意識に関する調査」

Citizenship for Children (CforC) とは？

『市民性』を起点に、自分らしいあり方を探求・実践するプログラム。ひとりひとりが自分らしい市民性を醸成し、行動できるようになることで、子どもと自分、地域のwell-beingをつくります。

「子どもや地域・社会との自分らしい関わり方」を仲間とともに探求する

一人の人であり市民である自分を客観視すること。子どものためだけでも自分のためだけでもない、その両者を大切にすることはどういうことかを問う視点をもった上で、具体的なアクションを起こすこと。そして、答えを求めるのではなく、学び続け、問い続ける姿勢を持つこと。そのような市民、また市民によるアクションが子どもの生活する日常の中に生まれ続けていくためにはどうすればいいのか。本プログラムはそのような問いから生まれました。

子どもの為に何かできることを考えるだけでなく、自分にとって心地よい関わり方とは何かを探求し、アクションに変えていくことで、子どもの生きる社会の中のひとりとして市民性の醸成を目指します。

市民の想いを社会の力に変える

本プログラムで取り組むのは、子どもの日常に関わる人たちの市民性の醸成・エンパワメントを通じて、さまざまな背景を有する子どもたちに対して柔軟で主体的なアクションが生まれる土壌づくりです。

子どもたちの育ちを支えるのは、専門的なサポートだけではありません。誰かに話をしたり話を聞いてもらったり、一緒に遊んだり、勉強したり。そんな日常を過ごす関係性の中にほっとできる安心感や、頼り頼られるという信頼感を積み重ねていくことが大切なのです。子どもたちの声に耳を傾けながら、豊かな関係性や温かいまなざしを子どもたちの周りに広げていくこと。そのために、**地域や社会の中に潜在する「自分のできることで地域や社会と関わりたい」「子どものためにも、自分のためにも何かしたい」という想いを社会の力に変えていく。それがCforCの取り組みです。**



Citizenship for Children (CforC) とは？

私たちの考える「市民性」とは

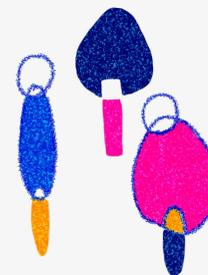
子どもたちをはじめ、誰もが孤立することなくwell-beingでいられる社会。そのような社会を目指すとき、不可欠となるのが「市民性」だと考えています。

PIECESではこの市民性という概念を、「私たちの周りを豊かにできるのは、私たち自身の力なんだと思えていること」だと捉えています。誰かや何かのことを想像し、関わりを持つ中で、影響を与えたり与えられたりしていく。その積み重ねを通して、自分の手元から小さく社会が変化していく実感が持てると、また誰かのために動こうと思うことができ、自分自身の豊かさにもつながっていく。市民性が醸成されることで、そのような循環が生まれていきます。

いま私たちの生きる社会では、様々な課題が複雑に絡み合っているため、多くの場合、唯一無二の解決策はありません。それどころか、1つの解決策に臨む過程で、他のところに歪みや綻びが生じることも起きています。だからこそ、誰かや何かに責任を求めるだけでなく、一人ひとりが生きる一瞬一瞬のなかで、自分たちの手元から社会に関わっていこうと思えることが大切なはずです。

市民性を持ち、それを発揮していく過程では、いろんな立場の人の利害や正義、価値観を受け止めていく必要があります。それは決して簡単なことではなく、葛藤や緊張が生まれます。それでも、安易な正解探しに走らず、複雑さやあいまいさとともにあること。誰かや何かを一方向的に切り捨てたり、自分とは違う価値観から目を背けることなく、内省と対話を続けていくこと。それが市民として生きることなのではないかと。

一人ひとりの根源にある願いや欲求を源泉とし、私だけでもあなただけでもなく、私たちにとって大切なことは何かを想像し、行動する。市民性が醸成された社会では、そのような営みが私たちの周りの至る所で生まれるのだと信じています。



CforC2021の全体像

今年度は新たな体制として、みつめる・うけとる・はたらきかけるという市民性発揮の3視点に沿ったコースで開催しました。

2021年7月～9月

みつめるコース

参加者
64人

講座＋ゼミ

7月から3か月間実施したみつめるコース。『同じ志を持った仲間とともに、子どもに心で応えるためのまなざしを学ぶ』ということに重きを置き、自分自身や子どもの感情、地域や社会の出来事をありのままにみつめていくためのまなざしやマインドセットを探求し、子どもと自分、地域のwell-beingを実現するためのベースとなるエッセンスを学びました。

2021年10月～2022年1月

うけとるコース

参加者
4人

リフレクション

みつめるコース修了後、『安心できる仲間と、発見したり葛藤したりしながら、私らしい「優しい間」を問い続ける』ことを学ぶ、うけとるコース。みつめるコースの内容に加え、全4回のリフレクションを通して、目の前の子どもの感情や願いに目を向けると同時に、自分自身の感情や願い、価値観にもじっくり向き合うプロセスを体験していきました。

2021年10月～2022年1月

はたらきかけるコース

参加者
30人

講座＋ゼミ＋リフレクション

みつめるコース修了後、『わたしたちのうけとった違和感や想いを、形にすることで優しい間のある地域へ』と目指していく、はたらきかけるコース。みつめる・うけとるコースの内容に加え、実際に自分も子どもも生きる地域で自分らしいアクションをしていくために、まちの資源の活かし方やコミュニティづくりについて探求していきました。

2022年2月～2022年5月

アクションサポート

参加者
13人

研修＋対話

うけとるコース、はたらきかけるコース修了後、それぞれの地域の中で自分が実践したいアイデアを具体的な形にするためのアクションサポート。今期は、13人が新規プロジェクトの立ち上げやアクションのさらなる探求に取り組んでいます。

活動報告: みつめるコース

講座3回 + ゼミ3回

講座

ゼミ

子どもの発達とこころのケア



講師: **小澤いぶき**
認定NPO法人PIECES
代表理事/児童精神科医

子どもたちの“生きづらさ”に心を寄せる



講師: **山下仁子さん**
NPO法人ビーンズふくしま

子どもへの“支援”を問い直す



講師: **神林俊一さん**
一般社団法人プレワーカーズ理事/
一般社団法人ジェイス理事

2021年7月

1

チームビルディング

8月

2

自己覚知

9月

3

自分らしい市民性のVisionを探る

みつめるコースでは全3回の講座を行い、オンライン上で講師と双方向に質疑応答や対話ができる時間を設けました。

そして、講座での知識から自分なりの「関わり方」を見つけていくために、月に一度ゼミを実施しました。実際に第3回目のゼミでは、『自分らしい市民性のVisionを探る』ことを目標に、ストレングスを探る視点についてのレクチャー、事例をストレングス視点で実際に捉えなおすワーク、参加者同士で自分たちのストレングスを考えるワークを行いました。

このゼミでのワークを通して参加者からは、「自分のストレングスを発見してもらって喜びから、自分のことが前よりも好きになった」「人との向き合い方の新しい視点を身につけられた」などの感想が寄せられました。

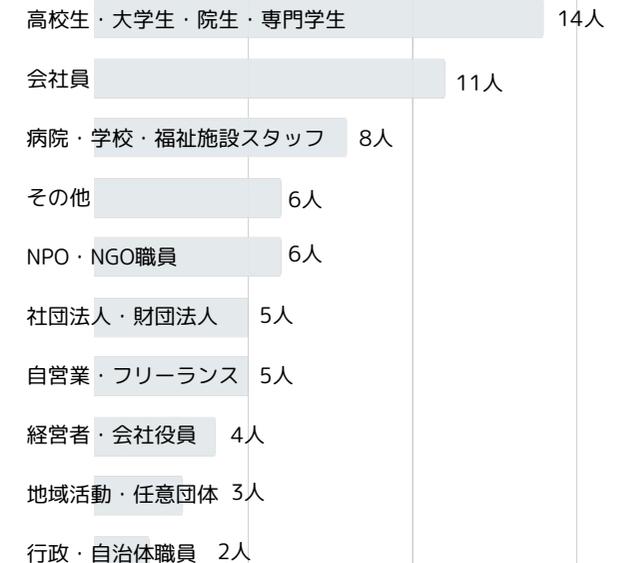
また、講座やゼミでの学びをさらに深め、実践につなげていけるように任意での自主ゼミも行いました。参加者同士で価値観や想いを共有していくことで、地域を越えて同じ志を持った仲間とつながることができました。

参加者データ みつめるコース（全66人）

年齢

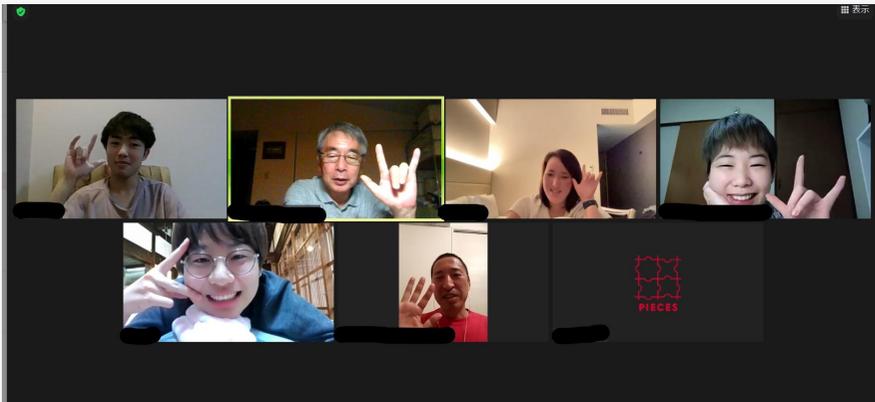


職業



活動報告：うけとるコース

みつめるコース + リフレクション4回



みつめるコース修了後から始まったうけとるコース。このコースではリフレクションを中心におこないました。リフレクションとは、関わりを客観的に振り返り、場面を再構成することで、相手の言動の背景にある考えや願いを探求し、自分自身の大切にしたい思いや価値観に気づくことを目的としています。特にPIECESの場合は、人と関わる際の違和感などを手掛かりに、「自分が大切にしたいこと」を大切にできるようになることも目的の一つに据えています。

具体的には、「プロセスレコード」（実際にあった、自分と子どもたちなどとの関わりを客観的に振り返るためのワークシート）を使いながら、その子どもの背景にはどんな感情や願いがあるのか、その時の自分の感情はどうだったのか、自分の言動の背景にはどんな価値観があるのか、など問いを投げかけて深めていきます。このプロセスを通して、目の前の一人に丁寧に関わるだけでなく、自分の価値観も大切にしながら、互いにとってより良い関わりかたをみつめることができるようになります。

実際に参加者からは、「自分を大切にすることで人に優しくなれた」「自分自身との向き合い方をみつめなおし、自分自身にも優しくなれた」などの感想が寄せられました。

また、今期はこれまでのリフレクションでの経験や知識をまとめたマニュアルを作成し、どんな人でも安全な場をつくり、効果的にリフレクションを行える形を整えました。

リフレクションマニュアル

Citizenship for Children

認定NPO法人PIECES

学習プロセス

グループで自主的に行っていくことができるようにするために「問い」の立て方と習慣にするためのレクシオンへの態度まで学びます。

ポイント	場づくり
繰り返していくことで	感情を出すことを無難にできるように気をつけるため、また、頭ではなく心で感じること外に出すことをサポートします。
始める前	初めてのリフレクションだと、自分が責められていると感じやすいため、そう感じないように場づくりを行います。
問い	自己認知しんどさを感じる人もいるので、グループで温かい空気をつくりたいです。
問いかけをかける	グループ内で問いかけあいが起こりやすいようにします。
全体的な質問を	グループ内で問いかけあいが起こりやすいようにします。

問いのデザイン

本人にとって満足度の高い時間にすることが出来ます。

意図	備考
方向性を確かめる	リフレクションシートで事前に確かめてもOK
向きを確かめる	
セッションへの心の準備状態を確認	初めてグループリフレクションをおこなう際、対象者に対して
向きをすり合わせる	自己認知を学習しインプットされている場面で
この場面を選んだ時、モヤモヤしたのか、困ったのか。どんな印象・気持ちが残っていますか？	冒頭で感情の言語化を促す。感情の蛇口を緩めておく

セッションの構成

リフレクションのセッションは、以下の順番で行っていきます。

目安	行うこと
音読	3min 発表者は自分のプロセスレコードを読み上げます。解説などは入れず、書いてある文章そのままを音読します。
導入	2min 今日のリフレクションのセッションの目的や進め方をグループで確認していくため、「1.焦点をあわせる問い」を問いかけます。
問いかけあい	30min 場の目的や進め方がグループ内に共有されたら、お互いに問いかけていきます。
問いかけた側からコメント	5min 発表者以外の参加者は、発表者への感謝、セッション全体の感想、自分が問いかけた原因（なぜその問いを問うたか？）を共有します。
発表者からコメント	3min 発表者は、セッション全体の感想を共有します。
セルフジャーナル	5min 一人で静かにリフレクションをして感じたことを、言葉や、ドローイングを通じて自分の外に出していきます。
気づきのシェア	15min グループを越えて、一人ひとりが感じたことを全体にシェアしていきます。誰かの心にふれることで、自分の心も動きます。

今年度作成したリフレクションマニュアル。目的、場・問いのデザイン、感情のラベルなど、リフレクションを進めるにあたって必要な内容がまとめられています。

活動報告: うけとる・はたらきかけるコース/アクションサポート

アクションサポートの概要

対話

プロジェクトを作っていくなかで、自分の考えを発酵させる場「間の発酵所」を毎月実施

研修

2022年2月

3月

4月

5月

1

想いを掘り下げる

2

ヒアリング&
リサーチ

3

セーフガーディング
トラウマインフォームドケア

4

プロジェクト実施!

アクションサポート

うけとる・はたらきかけるコース修了後、自分なりの市民性を発揮した新たなアクションやプロジェクトを形にしたり、既に取り組んでいるアクションやプロジェクトをアップデートしていくために、必要な知識や考え方を学ぶ、アクションサポート。これまでのコースでは取り扱っていない内容の「研修」と、対話を通じて内省と探求を深める「間の発酵所」を通じて、それぞれの優しい「間」をつくっていきます。このコースを通じて、前年度までに各地に8つのプロジェクトが生まれ、今期も新たに13名が新規プロジェクトの立ち上げや場のアップデートに取り組んでいます。

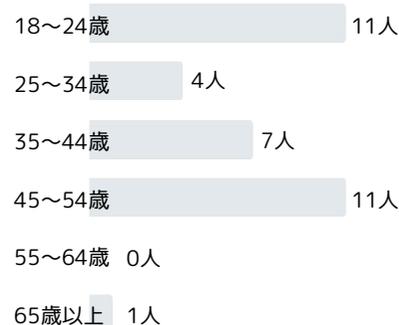
地域の枠を越えて学びあう

今期も全コースオンラインでの開催となり、東京、愛知、大阪、岡山、長崎、沖縄など日本各地に住む参加者が、それぞれの地域で自分にとっても相手にとっても「優しい間」をつくるための市民性を探求し、培っていきました。そして、オンラインで生まれたつながりをきっかけに、参加者や修了生の運営している場に相互に出向くなど、地域や年代を越えた深いつながりが生まれています。

参加者データ

うけ・はたコース (全34人)

年齢



職業

高校生・大学生・院生・専門学生	8人
会社員	6人
病院・学校・福祉施設スタッフ	6人
自営業・フリーランス	4人
その他	4人
NPO・NGO職員	3人
地域活動・任意団体	2人
社団法人・財団法人	1人

協業先紹介



NPO法人セカンドリーグ茨城

地域の資源をつなげることで「協働型社会」の実現を目指すNPO法人セカンドリーグ茨城と共同で、茨城エリア参加者向けにCforCを展開。2021年は全てオンラインでの開催となりましたが、プログラム外での参加者の基点の場所にもなりました。

Living in Peace

認定NPO法人Living in Peace

「機会の平等を通じた貧困削減」を目指す認定NPO法人Living in Peace (LIP) と共に、関西エリア参加者向けにCforCを展開。2021年はLIPが運営する子ども食堂「りっぶキッチン永和町」での実践は叶いませんでしたが、オンラインで共にCforCを運営していきました。

修了生が各地で取り組むプロジェクト

1

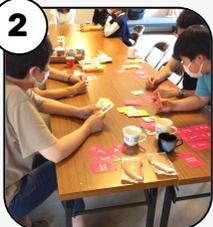


+ laugh (アンドラフ)

東京都多摩エリア

重症児（者）施設内に駄菓子屋と地域の方が自由に利用できる場を併設。地域の方が「自分のため」と感じる場をつくる。

2



正安寺ふらっと

茨城県水戸エリア

学校に行かない選択をしている子・学校になじめない子が、ふらっと気軽に寄れる居場所をお寺で開く。同お寺で、てらこやという取り組みも実施。

3



まちのこ団

茨城県県央～県北エリア

地域の小中高校生を対象に、子どもの「やりたい」を叶えるワークセッションやプレイバス（移動式あそび場）を実施。常設の場も今年オープン。

4



こころコンビニ

茨城県鉾田エリア

茨城県鉾田エリアにて、コンビニの一角にボードゲームや本などを置き、居場所を設置。子どもや地域の方がゆるく繋がり、しんどい時に本音を出せる場所をつくる。

5



こぼん

東京都世田谷エリア

気軽に声をかけあう地域の人（こぼん）を増やすプロジェクト。夜19時までの居場所の提供や多目的に大人も場に来る仕組みをつくる。

6



やまとたかだの「ヤサシマヤ」プロジェクト

奈良県大和高田エリア

支援に繋がらぬ子ども、社会貢献に関心がある市民との架け橋として、助け合いの場の情報やコラムを載せた「やさしましんぶん」を発行。

7



tori

福岡県大野城エリア

子どもたちの溜まり場としてだけでなく、地域の方が交流できるスペースとして、雑貨を扱うショップやコーヒースタンド小屋を設置。

8

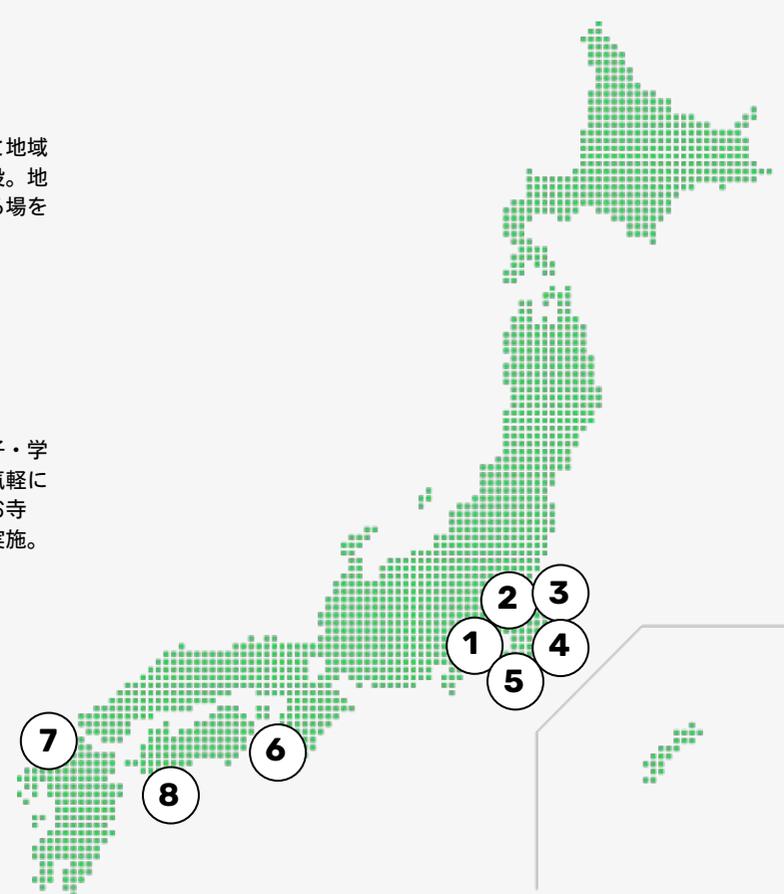


だがしやふいか

高知県朝倉エリア

週2日で民家の一角に駄菓子屋をオープンさせる。駄菓子を買う子どもやその場に居座る子どもなど、小学生が放課後に集まる。

自分らしい市民性について探求した修了生が、日本各地で優しい間を紡いでいます。ここに紹介するプロジェクト以外にも、日頃関わる人たちに一歩踏み込んでみる人、偶然気になった子どもや大人がいたときに一歩を踏み出してみる人。様々なカタチで市民性が広がってきています。



プロジェクトで生まれた子どもに関するエピソード

+laughがある商店街の近くには幼稚園や保育園、小学校など子どもが通う施設があります。駄菓子を売るお手伝いをするのは、+laughに通う重症児・者の利用者さん。駄菓子を買いにきた子どもたちとも自然と交流が生まれます。

ある日、駄菓子を買いに来た近所の子どもが「あれ何してるの？大丈夫なの？」と、利用者さんの体について管を見て言いました。

「あれで栄養をとっているから大丈夫だよ」と言うと、「ふーん、そうなんだ」と言いました。こうした日々の交流から、障害の有無を超えた関係性が生まれるのかもしれない。

① +laugh (アンドラフ)

息子の友人たちが連日遊びにくる我が家。地域の人とも交流できるように、家の敷地内にコーヒースタンド小屋を作ったり、マルシェを開催し始めました。

普段は子どもたちだけの我が家も、地域の小物作家さんたちや地域のママさんたちも集まり、夏には30人で花火もしました。地域にさらに交流が生まれるように、子ども食堂の開催やテイクアウトごはんの販売などにもチャレンジしています。

⑦ tori

「まだ遊ぶ！」と営業終了時間を過ぎてもいようとする子がいた時、なぜ帰りたくないのか、ということを考えます。夕方の遊びの時間が終われば、一般的に次は夕食の時間です。そこで、なかなか帰らない子に「家帰って誰かおらん？」と聞くと「だれもおらん」とか「お兄ちゃんしかおらん」という返答が返ってることがあります。共働きで帰ってくるのが遅いとか。そんなときは、そうかそうかと言って、少し遊びつつ、一緒に家まで送ったりします。気になる行動には、何かしらの理由がある、そんなことを実感します。

⑧ だがしやふいーか

学習効果

アンケート調査からみえる参加者の学び

CforC のプログラムを受ける前と受けた後で、参加者にどのような変化があったのかを確認するためにアンケート調査を実施しました。ここでは、その分析結果をご紹介します。

学習効果について

プログラム参加者にアンケート調査を実施

CforC では、子どもと関わるための「知識理解」「スキル・行動（市民性）」「スキル・行動（子どもとの関わり）」「マインドセット（市民性）」「マインドセット（子どもとの関わり）」を学びます。そこで、それぞれどの程度学習が進んだかを確認するために、プログラム開始前と修了後で、同じ項目のアンケート（質問数 33）を実施し、ウィルコクソンの順位和検定で分析を行いました。

みつめるコース

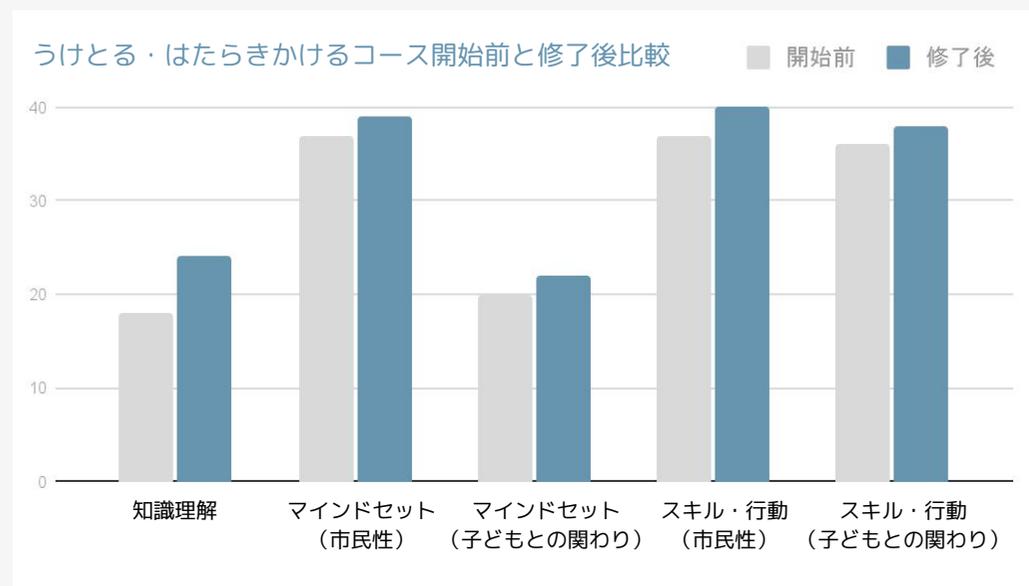
知識理解が進み、子どもとの関わり方や人生への影響がみえた

すべてのカテゴリで、得点が向上していましたが、特に「知識理解」のカテゴリで、有意差がみられました。講座やゼミを通して、子どもが孤立する背景や発達段階ごとのケアのあり方など、基本的な知識理解が進んでいたことが窺えます。

また、マインドセット（子どもとの関わり）においては、支援観の変化について有意差がありました。ここから、子どもと関わる心構えまで身につけていたことがわかります。また、スキル・行動（市民性）の項目においても、「自分の人生における「子どもに関わること」の意義を語る」ことができ、自分の果たしたい役割を強く感じているという項目で有意差がみられ、人生への影響も垣間見えました。

うけとる・はたらきかけるコース

市民性の醸成が、スキル・行動、マインドセットで進む



すべてのカテゴリで得点が向上していましたが、特に「マインドセット（市民性）」「スキル・行動（市民性）」で有意差がみられました。うけとる・はたらきかけるコースまで進むことで、より深い理解が進み、価値観が変化し、市民性発揮できる状態へと変化していました。

また、子どもとの関わりについても変化があり、スキル行動面では、有意差がみられ、マインドセットの面では、「こころで応える優しい関わり」や、「自分の感情との付き合い方」「チームで活動する」などの項目で有意差がみられました。市民性に加え、子どもとの実際の関わり方も変化していていることがわかります。

参加者自身や周囲に生じた変化

参加者の具体的な変化

Q. このプログラムに参加して、変化した自分の行動があれば教えてください。（複数回答）

子どもや他者と関わる際に、言動・行動の背景について深く考え、想像しながら関わるようになった

74.0%

自分なりの子どもとの関わりについて考えるようになった

81.4%

日常の中で子どもと実際に関わる機会が増えた

33.3%

職場や家庭、サークル活動など、子どもとの関わり以外でのコミュニケーションが変化した

59.2%

これまで気がつかなかった子どもや他者の姿に気づいたり、言動・行動の捉え方に変化が生じた

59.2%

子どもと関わる際の関わり方（声の掛け方、距離感など）を工夫するようになった

55.5%

プログラムを受けて子どもとの関わりでどのような変化があったのかを具体的に聞いたところ、全参加者のうち 7割以上が「子どもの発言の背景を考えるようになった」と回答し、子どもとの関わりに重要な想像力が培われていることがわかりました。

Q. プログラムに参加するようになって、子どもの様子で変化したものがあれば教えてください。（複数回答）

子どもから話しかけられる機会が増えた

44.4%

自分以外の人や資源を紹介して、新しいつながりを生むことがあった

44.4%

子どもと一緒に時間や体験を共有する時間が増えた

29.6%

子どもから家族や学校、友達の話聞く機会が増えた

18.5%

子どもから好きなことや得意なことについて話を聞く機会が増えた

37.0%

継続的な関わりをする子どもとの出会いがあった

25.9%

子どもから悩みや相談を受ける機会が増えた

18.5%

子どもの様子に変化したかどうかについて聞いた項目では、「子どもから話しかけられる機会が増えた」（全参加者のうち約44%）、「子どもから好きなことや得意なことについて話を聞く機会が増えた」（同 約37%）子どもとの関係性が変化したとの声が多く見られました。

参加者の声

他者と自分の考え方・意見・経験について、「共感」できる部分だけではなく、違いについて捉えながらも、違いの持っている願いに線を引くことなく関わり合おうとする「やさしい間」を、子ども以外の人に対しても大切にしながら関わることで、自分自身もすごく安心・柔軟なコミュニケーションをできる感覚が育ちました。

これまで他者との違いに対して「違うのは寂しいこと」として捉えていて、共感できる人に対して自分が前のめりになってしまう感覚がありましたが、違いに目を向けることができるようになったことで、他者との関係性にいい意味で執着しなくなったり、自分の中だけで持っている願いや核みたいなのを信じることもできるようになった気がします。

大学生・16～24歳

学校で相談員として働いているが、教員でも専門職でもない役割のため、本当は関わりたいけど「相談室にくる子だけでいいや」というように関わる範囲を区切るようになっていた。

でも、プログラムを通して、自分の気持ちを大事にした方がいいと思うようになった。

ヤングケアラーの子に会ったときに、「勉強どうなの？お父さんと相談して、自分の時間つくりな。3月までは自分の時間を優先しな」という突っ込んだことも言えた。話を聞くこともだけど、助けたりサポートしたいので、こそこそやっていこうかな。

問題を掘り起こしたくないという気持ちもわかるけど、寄り添うこともしたいと思った。程よい元の感じでやっていこうと思えた。

学校関係・45～54歳

プレーカーに来る人に対しても最初からwelcomeの気持ちじゃなかった。お母さんたちが子どもをプレーリーダーに預ける、自分は汚れたくないという感じだった。それもわかるが、優しい気持ちになれなかった。木工エリアはお母さんと一緒にやってと言っているが、子どもだけでやっていて、お母さんに声かけしたり。ある日ナタを使っていた子どもがいて、子どもに声をかけて教えていたら、お母さんが駆け寄ってきてくれた。プレーワーカーがいるとプロだと思ってそのままにしてしまうが、自分みたいなお母さんがやっていると思うんだなど。だから、自分が手を貸せるなら貸せばいいし。自分の中で、人に対するハードルが下がって、人をジャッジせず、自分が動けるようになった。そのおかげで、違うことに気づけた。人に対しての先入観がなくなった。

NPO/NGO職員・45～54歳

専門性がなくても、自分がやってる居場所や活動を肯定できるようになった。このままでいいのかと苦しいところがあったけど、観察するところに意味があると思えた。一回自分のことを肯定して、また新しい課題が見えた。すごく楽になった感じがあった。

「自分が何をしているのか」の問いが少し腑に落ちた。

地域活動/任意団体 45～54歳

今後に向けて

試行錯誤を重ねてきたCforCは、いよいよ普及・発展フェーズへ！

今期はこれまで参加ハードルとなっていたプログラムの開催期間に変更を加えるなど、コースデザインを大幅に刷新しました。その効果もあり、**プログラムへの関心層（説明会申込者）は昨年比約1.5倍の229名、参加者は昨年比約2倍の67名**となり、いずれも大幅な増加につながりました。プログラム内容についても、前年から続くコロナ禍でのニューノーマルに対応し、**オンライン環境下での効果的なコンテンツ作りや参加者同士で学習を深めるためのツールキットの開発**も進めることができました。

一方、運営面では、プログラム修了生がチューターとして運営側に参画するといった循環や、本職で多様な知識やスキルを持った方々にプロボノとして運営に協力いただく機会も増え、より持続可能かつ有機的な運営の形が生まれ始めています。

来期以降は、プログラムも本格的に普及・発展フェーズに差し掛かっていきます。しかし、PIECESだけではこのCforCの取り組みを広げていくことに限界があることもまた事実です。**今後は、各地の多様な活動主体とより一層パートナーシップを築きながら活動の輪を広げていくための仕組みづくりに取り組んでいきます。**

子どもたちがより一層孤立化することが危惧される中、一朝一夕では地域における「気づきの目」や「安心できるつながり先」は生まれません。だからこそ、**市民性の醸成を起点に、各地で当事者意識を持った市民の手によって、子どもの健康やWell-beingを支えるための小さなアクションが生まれ続けるための土壌**を今後も作り続けていきたいと考えています。

CforC2022は7月からプログラム開始予定

CforC2022のプログラムは、5月中旬頃から募集開始、7月からプログラム開始予定です。プログラムに参加予定の方、また関心をお持ちの方は是非CforCのメルマガにご登録ください。募集に関する情報等をお届けします。

登録は下記URLかQRコードにアクセス！

<https://www.citizenship-for-children.org/>



CforCプログラムをあなたの地域でも実施しませんか？

これまで、全国各地で500名以上の方々に届けてきたCforCプログラム。その多くは、各地で子どもに関わる取り組みを直接的・間接的に取り組む団体や大学との協働で実施しています。3~6ヶ月間のまとまったパッケージをそのまま地域で実施することも可能ですし、各地域や団体に合わせてカスタマイズしてお届けすることも可能です。まずはお気軽にご相談お待ちしております！

1 CforCプログラムで開発されたツールやコンテンツを使用する

プログラムの一部を自団体に取り入れて実施したいというニーズにお応えするために、学習キットなどをお渡ししています。

導入実践例：一般社団法人We are Buddies

2 地域や団体のニーズに合わせて研修やワークを実施する

CforCプログラムを団体内部向けに実施したり、地域や団体のニーズに合わせてカスタマイズして実施することも可能です。

導入実践例：NPO法人SOMA、NPO法人ピッコラーレ

3 CforCプログラムを自分の地域で実施する

あなたの地域でプログラムを実施し、地域で活動する市民を増やします。実施は、PIECESと協働という形で、一部役割を分担しながら実施します。協働の形は相談しながら決定します。

導入実践例：CforCプログラム in 水戸、CforCプログラム in 奈良

4 CforCプログラムに法人スポンサーとして協賛する

子どもが安心して豊かに生きられるWell-beingな社会の実現に向けて、プログラムへのご協賛を受け付けています。金額や頻度など柔軟に対応していますので、お気軽にご連絡ください。

寄付・助成実績：株式会社大和証券グループ本社、
ゴールドマン・サックス、CBグループマネジメント株式会社 など

※詳細やお問い合わせについては、CforCのWEBサイト
(<https://www.citizenship-for-children.org/>) をご覧ください。

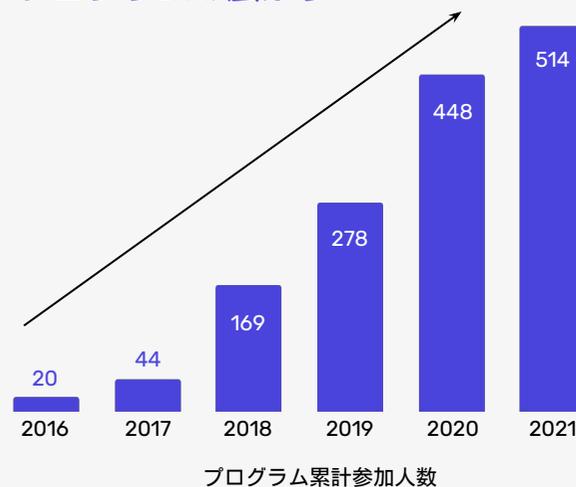
Special Thanks

CforC2021の活動に寄付・助成をいただいた 企業・財団（敬称略）

法人や団体のみならずからご寄付や助成金をいただくことで、子どもが孤立しない地域をつくる市民性醸成プログラム「CforC」の参加者は全国に広がり始めています。本当にありがとうございます。これからも、さまざまな形でパートナーシップを育みながら、活動を発展させていければと思っていますので、引き続きの応援よろしくをお願いします。

- ・CBグループマネジメント株式会社
- ・公益財団法人パブリックリソース財団「匿名基金A」
- ・日本ユニシスグループ社会貢献クラブ「ユニハート」
- ・2021年度日本郵便年賀寄付金助成

プログラムの広がり



CforCプログラムの運営は、PIECESメイト（毎月の継続寄付者）によって支えられています。PIECESメイトの広がりによってCforCプログラムの累計参加人数は、今年500人を超えました。今期もたくさんの応援をありがとうございます！

PIECESメイト（2022年2月末時点）：**453人**

CforC2021の運営メンバー紹介



青木翔子



齋典道



くりのさやか



佐藤麻衣



酒井美佳



小山恵



中島巳歌



塚本柚果



米田直子



別府拓也



直井昌士



森井奈津子



影近卓大





団体名 認定NPO 法人PIECES

住所 〒113-0033 東京都文京区本郷3-40-10 三翔ビル本郷 7F
小野田高砂法律事務所内 social hive HONGO

E-mail info@pieces.tokyo

設立日 2016年6月22日

ホームページ <https://www.pieces.to>

制作協力 写真：吉澤健太 イラスト：Jessie(J).